

由な自己規定のみを提出しうる。すなわち、主体はそれぞれの論証によって自由に決断し、何をなすことが理性的であるかを自ら規定する。そのための法則的指示など存在しない。」彼はまた、自由こそが究極の規範であると述べている。ここで問題になっているのは、もはや定立された一定の規範ではなく、規範のたえざる根拠づけである。すなわち問題は、何らかの徳目のような形で表現された諸々の規範ではなく、具体的な問題状況に直面した主体が、その状況でいかに行為すべきか、そしてそれがその具体的状況においていかに普遍的たりうるかを問う、批判的運動である。したがって教育の課題は、すでに対象化された規範との関係にあるのではなく、主体自身による規範の批判的根拠づけにある。もはや規範の一定の具体的内容の提示が問題なのではなく、規範のいわば生成過程、創出過程が重要な意味をもつ。そしてこのことは、被教育者においても、教育者においても、教育の意味についての間においても、教育学自身についての間においても、妥当すると考えられる。

「信文類」の課題

小野蓮明

一 親鸞の根本述作である『教行信証』は、『顕浄土真実教行証文類』という題号が示しているように、「浄土の真実である教行証を顕わにする」という極めて具体的に示した課題をもつ聖教である。その課題性を一言にしていえば、仏道の現在性を「行証」或は「証道」という一点において確認しようとするとき、ここに見定められた唯仏一道は、法然によって興行された浄土の正宗こそ、「証道今盛ん」なる「浄土の真宗」であることを、明らかにせんがためである。浄土の正宗を「浄土の真宗」と確認したということは、「行証久しく廃れ」た「聖道の諸教」に簡んで、真実なる宗旨として現行する唯仏一道の成就を、法然によって説き示された選択本願念仏の一道に見開いたということである。

『教行信証』の撰述動機については、一般には、承元の法難をはじめとする聖道仏教の度び重なる念仏弾圧や論難に対し、或は、法然滅後その門下にさまざまな異義が続出し、選択本願念仏の真意が見失われようとしたのに対して、親鸞がそれらの論難、弾圧、異義を鋭く批判すると共に、法然の専修念仏の立場の真实性を顕せんとしたものであるといわれる。そのことは、別序に「然るに末代の道俗・近世の宗師、自性唯心に沈みて浄土の真証を貶す、定散の自心に迷いて金剛の真信に昏し」といい、総序に「穢を捨て浄を欣い、行に迷い信に惑い、心昏く識寡なく、悪重く障多きもの、特に如来の発遣を仰ぎ、必ず最勝の直道に帰して、専らこ

の行に奉え、ただこの信を崇めよ」といい、更に後序に「然るに諸寺の釈門、教に昏くして真仮の門戸を知らず、洛都の儒林、行に迷うて邪正の道路を弁うることなし」等と述べられていることから窺い知られる。いま特に別序に「末代の道俗・近世の宗師、自性唯心に沈みて浄土の真証を貶す、定散の自心に迷いて金剛の真信に昏し」と歎かなければならなかった一点にこそ、『教行信証』撰述の最も大きな理由があると思われる。聖道の仏教に対する教相判釈、真仮偽という独自の批判、願力回向の信こそ横超の菩提心であることを明す三心釈、真仏弟子釈、それらすべてが、信の如実・不如実についてなされているのを見ても、「信巻」こそ『教行信証』の展開軸であるといえる。

二 しかし「信巻」は、『教行信証』の撰述問題と絡んで種々に捉えられてきた。たとえば、撰述について元仁元年説と帰洛後説が主張されたとき、両説の成立する要素を認める立場から、『教行信証』は、始めに「教行証文類」が製作され、以後に「信文類」が撰述されて、それが合冊されたとする、いわゆる信巻別撰説などがある。別撰説の要旨は、『教行信証』は題名を『願浄土真実教行証文類』とあって、「信文類」を含まないのが本来の形であるということ、或は、「信巻」に別序があるが、それは「信巻」が重要であるからといわれているが、しかし親鸞自身そのようなことをいっていないし、また一部の著述の途中に序があるのは極めて不自然である、などの理由によるものである。

しかし、既に指摘されているように「信巻」に別序があるから別撰なのではなくて、教行証の三法に立脚しながら、特に信の問題を明らかにしなければならぬ必然的理由があったからである。古くは『六要鈔』で存覚が「これ安心の巻、要須たるが故にこの

別序あり」といっているように、親鸞は行の問題から信の問題を見出して信心という自覚の問題を提起したのである。念仏の伝統を明らかにした「行巻」の帰結は「正信偈」であるが、その「正信偈」は正信念仏の行をたたえて、われらに信を勧めている。「夫れにみれば信樂を獲得することは……」と書き出されている別序発端の「夫れ」は、「正信偈」に「至心信樂願為因」とある「信樂」を承けたものであるという了解がある。「本願名号正定業」について「行巻」で、「至心信樂願為因」について「信巻」に展開する。「等覺を成り大涅槃を証することは、必至滅度の願成就なり」といわれていることからすれば、至心信樂が必至滅度の因であることを明らかにするのが「信巻」である。

親鸞が「末代の道俗・近世の宗師」について、「自性唯心に沈みて浄土の真証を貶す、定散の自心に迷いて金剛の真信に昏し」といって信仰批判するのも、問題は信心の有無ではなく、信心の純・不純の問題であった。即ち、「諸仏如来の真説に信順して、論家・釈家の宗義を披闡す。広く三經の光沢を蒙りて、特に一心の華文を開く。しばらく疑問を至しついに明証を出だす」といって、信心が主体的自覚の問題であることを提起したのである。三經の光沢と一心の華文、それは浄土の三部經と「浄土論」の一論であるが、三經一論の根本問題が信心の問題であり、それが「信巻」で三心一問答として信心の自覚の問題がとりあげられ、論主の一心こそ如来の願心の回向成就としての信心であることを明らかにしたのである。

三 法然の『選択集』は、親鸞にとって「真宗の簡要、念仏の奥義これに撰在せ」るものであった。しかし、『教行信証』において選択本願念仏のまことを開顯しなければならなかったのは、

「自性唯心に沈み」「定散の自心に迷」うものがあつたからである。『教行信証』は、そのような沈迷の機に対する批判を基盤とするが、では何故に定散の自心に迷うものが出たのであろうか。

その理由にはいろいろ考えられるが、その一つには『選択集』の三心章があると思われる。三心章は「念仏の行者必ず三心を具足すべきの文」と標して、善導の「散善義」の三心積と「往生礼讃」の三心積が引用され、その私釈に、

所引三心者は行者至要也。所以者何。『経』則云「具三心」者必生彼国也。明知、具三必心得生。『釈』則云「若少三」一心即不得生。明知、一少是更不可。因茲欲生三極樂之人、全可具足三心也。

とある。いまこの私釈に注意するとき、行者の至要としての三心は、恰も行者各発の信心のようににも思われる。親鸞は、念仏が正定の業であるのは本願の行であるからであるという法然の教説を承けつつ、行者至要の三心は如来の願心の回向成就としての信心であることを明らかにする。それが「信巻」の事業である。三心章は、法然の私釈は短かく殆んど善導の三心積の引用であるが、『選択集』の付属を許された親鸞は、その付属の意趣の底に、善導の三心積を更に明らかにせよという、法然の思召を感得されたのではないか。それが「信巻」の開頭であるともいえる。

更には、専修念仏一行を正定の業と決定し、永く仏道実践の命根といわれてきた発菩提心を無要といひ切つた法然の主張に対して、鋭く批判し論破したのは明恵を代表とする聖道の仏者達であつた。それは、たび重なる専修念仏の禁圧、或は『選択集』の弾劾として続くが、親鸞はそのことを決して看過することはできなかった。むしろ、「よきひと」とその「おぼせ」にかけられた厳

しい批判を、直ちに自らに課せられた批判として受けとめ、自身に荷負されたに違いない。「信巻」は親鸞の菩提心論として、そのような歴史的課題に応答するものといえる。

四 曇鸞・善導の三心論に導かれて、親鸞は、

爾者若行若信、無レ有レ一事、非三阿弥陀如来清淨願心之所二回向成就。非二無レ因他因有レ一也、可レ知。

といつて、衆生に発起する信心が如来の願心の回向成就であることを明らかにしたのが、三心一心問答である。親鸞によれば信心とは本願の信であつて、二河譬の釈迦・弥陀二尊の発遣と招喚に見られるように、本願に喚びさまされた自覚、根源的な覚醒である。三一問答はそのことを更に一步根源化して、衆生に発起する信心は如来の願心の回向成就であるという。衆生の信心と如来の願心とは決して別のものでなく、願心と信心は二にして一、回向成就として一であるという信仰了解である。その了解は「行巻」の名号釈においても明瞭である。帰命が即ち本願招喚の勅命であるという。一心帰命の信心とは衆生が如来に帰した心であるというよりも、衆生の上に現前し現行した如来の欲生心の外ではなく、如来自身の名告り、如来の自己表現である。従つて欲生我國の願心、法蔵の願心のみが永劫流転に堪え得る根源的主体であるといえよう。本願において「至心信樂欲生我國」と喚ぶ三心は、五劫思惟において決定した「乃至十念」を真に衆生の行として成就せんとする仏心の全現であり、衆生を往生せしめることにおいて如来が真に如来たらんとする如来の大悲心である。それ故に大悲願心としての法蔵の願心こそ、機の中の更に機なるものとして根源的主体であるといえまいか。一心帰命の信心と如来の願心とが回向成就として一如であるという信仰了解の根底には、「設我得仏

十方衆生」と誓ひ出された本願の「我」と、「世尊我一心」と帰依信願を表白された天親の「我」とは、畢竟別の主体ではなく、大悲願心の主体が願生心の主体として現前現行しているという領きが一問答の意趣である。大悲願心の主体とは、「一如宝海よりかたちをあらわして、法蔵菩薩となりのりたまいて無碍のちかひをおこしたまう」た法蔵菩薩である。故に三一問答は、親鸞における法蔵菩薩自証の道理を明らかにしたものといえよう。

本願の意義を本願成就ということに立って問い尋ね、本願の成就は信心の成就であり、それは信仰の主体の成就であることを明らかにしたのが「信巻」である。信心とは本願招喚に喚びさまされた根源的覚醒であるが、しかしそれは単なる意識の範疇のことではなく、本願を依止とする存在の質的転換乃至転成を意味する。本願成就ということのこのような厳密な意味を尋ねたのが「信巻」である。本願成就文の主体的な了解は、何よりも親鸞の深遠な信仰的思索と体験によるものであるが、その眼を開かしめたものは恐らく天親・曇鸞の教学との出遇いである。就中『論註』の不虛住持功德の教説に導かれたことは疑いない。「浄土の眞実信心の人は、この身こそあさましき不浄造惡の身なれども、心はすでに如来とひとしければ如来とひとしと申す」といわれるような実存の在り方、即ち本願の信において、人は空過流転に打ち克つて、よく速かに功德の大宝海を身に満足し無上涅槃のはたらく機に転成するのである。親鸞は本願の信が成就する機を「金剛心の行人」と捉え、「眞の仏弟子」として明らかにする。「具縛の凡愚・屠沽の下類」を機とする大般涅槃道の成就、無上仏道開顯こそ「信巻」の課題であつたのである。